

参考資料

参考1：アンケート調査にみる保存再生活動の6つの共通課題

参考2：さまざまな水文化

参考3：水文化の保存再生活動

参考1：アンケート調査にみる保存再生活動の6つの共通課題

アンケート名：『水文化の保存・再生活動に関するアンケート調査』

調査主体：国土庁水資源部

調査対象：特定農山村地域、振興山村地域、過疎地域、半島地域、離島地域に指定された2,108市町村

調査方法：郵送留置方式・自記式

調査期間：平成11年11月20日から約1ヶ月間

回収状況：636市町村（うち14自治体は団体名不明）30.2%

共通課題1「流域圏単位の総合的な活動展開」

環境関連の保存再生を進めるためには、河口～涵養林の流域圏全体で、水循環や生態系連鎖等の影響を考慮した活動が不可欠といわれる。しかし、現在の活動の多くは行政区域単位であり地域間の横の連携は殆どみられない。また、水文化関連の保存再生活動も、水質改善等の環境関連の活動と連携を図ることが重要であるが、目的を絞った活動が多い。今後は、流域圏単位の組織を作り、分野横断的な活動を進めていくことが必要である。

共通課題2「住民と行政との役割分担と連携」

水文化関連の活動は、住民と行政との連携が図られていないケースが多い。今後、流域圏での総合的な活動を展開していくために、行政と住民等の各活動主体の性格や保有資源を見極め、地域ごとに適切な棲み分けと連携を強化していくことが必要である。

共通課題3「画一性を払拭し地域特性を生かした活動展開」

これまで、住民活動、行政活動とも、全国画一的な運動が展開されることが多かった。今後は、地域特性を十分考慮し、限られた資源を適切に配分したオリジナルな活動を展開する必要がある。

共通課題4「水文化を継承者の育成」

多くの地域で水文化の継承者が少なくなり、また、若年層の流出等により水文化を継承・伝承していくことが困難な状況になっている。今後は、直接的な保存再生活動の充実のみならず、継承者の育成を課題と認識し、行政等が支援する体制づくりが必要である。

共通課題5「住民参加を促進する工夫」

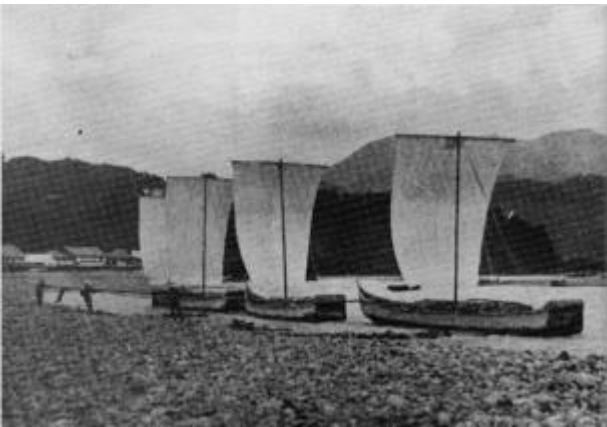


今後は、活動に住民の参加を促進させるような仕組みが必要である。イベント化等の直接的な手段に加え、環境教育や啓発活動の展開により、水問題は住民自身の問題であるという意識づけが必要となる。

共通課題6「日常的、予防的な活動展開」

活発な活動の契機となるのは、渇水等の緊急事態を経験し、生活レベルでの危機感を地域社会全体で共有した場合である。今後は、緊急事態を経験しなくとも、予防的に活動に取り組むことが必要である。

参考2：さまざまな水文化



川舟

場所	名称	概要
静岡県 大井川	高瀬舟	<p>大井川流域の輸送・交通は古くは舟運が中心で、下流部では帆のある「高瀬舟」が、上流部ではやや小型の「うかい舟」が利用された。上流部では出材がさかんで、材木を1本1本流す「川狩り」と呼ばれる搬出方法で流送が行われていた。しかし、昭和初期の大井川ダムの建設と大井川鉄道の敷設により、こうした出材は鉄道による運材に変わっていった。</p>  <p>(資料：本川根教育委員会「ふるさと本川根」)</p>
山口県 岩国市	なくわ 南桑船	<p>地域の水運の中心をなした錦川は中流の行波に藩の米蔵が設置され、その周辺の年貢米を収納していた。これらの年貢米や上流域（萩本藩領）からの薪炭、こんにゃく、山代紙は、錦見の城下町や今津の萩倉へ水運を利用して運ばれていた。当時、南桑を拠点として城下町との間で生活物資を輸送する船は「南桑船」と呼ばれた。錦帯橋下の河原には、船頭が仮宿を組んで宿泊し、独特の景観を生みだしていた。</p>  <p>(資料：http://ww2.enjoy.ne.jp/~h.kurata.co/jpeg/photo2.jpeg)</p>
高知県 四万十川	せんば 舟母	<p>舟母とは四万十川で長く使われていたほかけ舟の名称。中流地域から、下流の流通拠点中村まで薪、墨や木材を運搬していた。中村からは、土佐高知や大阪へと転送されていた。昭和20年代頃、陸路発達と沈下橋の建設により航行が困難となり衰退していった。舟母は、モノの輸送にあわせ、中流域に大阪や土地高知の情報を伝える役割を果たした。</p>  <p>(資料：野本寛一「四万十川民族誌」)</p>
福岡県 犀川町	ひらた船	<p>「川ひらた」「ひらた船」と呼ばれる川舟は、江戸から大正にかけて遠賀川、堀川の輸送手段として活躍した。浅い川で運送可能なように、喫水が浅く、船べりが広いのが特徴である。この間、輸送物資も米や雑貨から石炭へと変化していったが、川は、次第に運送路として使用されなくなっていった。現在は、かつての勇姿を偲ぶのは困難になりつつあるが、県の有形民俗文化財として指定されている「ひらた船」は、長さ10m以上、積載量は6tを超える。</p>




廻船業

場所	名称	概要
山口県 岩国市	尾州廻船 内海船	当地域は江戸時代末期から明治時代中頃まで廻船業が盛んであった。尾州廻船内海船といわれ、買積方式により江戸～瀬戸内地方を中心に、米や肥料などを輸送していた。「戎講」という組合をつくり運営していた。

木材流送

場所	名称	概要
静岡県 大井川 流域	てっぼうぜき 鉄砲堰	<p>大井川上流西俣川の支流小西俣では戦後遅くまで「てっぼう」が活躍していた。堰が切られた瞬間に、ダムにためられた材木が濁流と共にすさまじい音を立てて流出される。川狩りのシンボルは、この鉄砲であった。丸太を組んだ堰堤で川水を止め、そ堰を切って一度に放流される流水の力でいっきに押し流す方法である。</p> <p>明治の中頃から昭和初期にかけて盛んに行われ、大井川源流部では昭和30年代まで続けられていた。</p>
		 <p>(資料：本川根教育委員会「ふるさと本川根」)</p>
熊本県 多良木 町	球磨川流域 の「水の道」 「川の道」	同町は、日本三急流の一つ球磨川上流に位置し、近世～近代には球磨川を「水の道」として、筏を組み、良質の木材を提供していた。かつて、林業は、隆盛を極めていたが、後継者不足と価格低迷のため、現在では、林業の経営は極めて困難となってしまった。
新潟県 守門村	きろ 木呂流し	奥山より伐り出した燃料用薪「木呂」を切り出した現地の沢、川へ流すことにより、町場へ輸送した。「木呂流し」という。
青森県 岩崎村	筏えもの	岩木山からの切り出し木材を、松神の浜から停泊した船まで筏で運ぶ。切り出し木材を仕上げる人を「筏えもの」と呼ぶ。
徳島県 木沢村	ひよう・ 流し	<p>古くから林業が盛んな地域である。道路のない頃は、谷川の水を利用し堰出しや鉄砲堰により木材を川下へ流した。本流からは1本1本トピ口を打込み流していた。これに従事する人々を「ひよう」または「流し」と呼んでいた。</p> <p>10km下流の隣村からは筏に組んで2～3日をかけて、河口の製材所地帯に流送した。</p>
		 <p>(資料：徳島県木頭村)</p>



伝統漁法

場所	名称	概要	
長野県 諏訪市	氷上漁法 やっか 屋塚	冬季結氷前に三つだめの法で位置を決め、2 m位の湖底に径15～25cm位の石を300～400個沈め、鮒・えび等の冬ごりの場所にする。結氷を待ち氷を切り、周囲に簀(す)を張り巡し、石を上げて魚を追い出し網で掬う。	 <p>(資料：諏訪市博物館)</p>
和歌山 県古座 川町	火振り漁	予め、川を横断するように網を仕掛け、夜、舟を出し、舟上でかがり火を振る。アユは、水面に映る火の帯に驚き逃げまどい、網の中に追い込まれる。夏の風物詩。	 <p>(資料：中村市観光協会)</p>
高知県 四万十 川流域	ゴリのガ ラ曳き漁	50～60m超のロープに数百個のサザエ貝殻を結びつけ、縄の両端に舟と人を配し、予め仕掛けておいた四つ手網の方向にロープを引張りゴリを威して群を追い込む。追い込む際の貝の「ガラガラ」音が漁名の由来。	 <p>(資料：中村市観光協会)</p>
愛知県 稲武村	梁漁	業面では毎年8～10月にかけて根羽川(矢作川支流)に梁がかけられる。過去には矢作川でも梁漁が行われていたが現在は行われていない。	
埼玉県 皆野町	ウグイ漁	国指定重要民俗文化財「荒川水系の漁撈用具」の収集地である皆野町は、荒川を中心とした漁業が古くから発展してきた。山女魚、岩魚をはじめ、カジカ、ウグイ等の多彩な魚種が漁の対象となり、多様な漁法も発展した。	
鳥取県 美朝町	ウグイ漁	寒くなる頃に産卵で集まるウグイを捕獲する「ツキ」という漁法がある。「ツキ」は小石により楕円の形を作ってウグイを取る。この伝統漁法は、現在では見られない。	

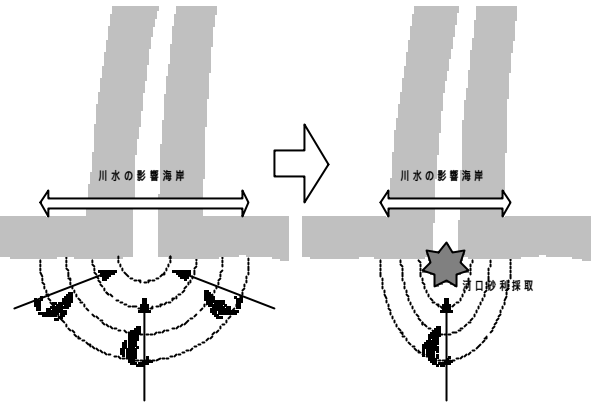
次頁へ続く～伝統漁法

場所	名称	概要
熊本県 五木村	ホコ突き	村の中心を珠磨川の支流川辺川が貫通しており、川漁も盛んであった。大小の支流は、村人の遊びの場として、また食料の一部となる魚介を採るところでもある。漁の方法は、投げ網、ヤナ漁、ホコ突き等がある。
大分県 佐伯市	シロウオ 漁	番匠川に古くから伝わる漁法で、笹垣を並べその笹垣に舟を寄せ、舟の上からシロウオを三角形の大きな網に誘い込みすくう。
宮崎県 東郷町	ちゃん掛け ほか	漁業の方法で鮎を「友釣り」「ちゃん掛け」「堰」といったやり方でとらえている。
高知県 四万十 川流域	ウナギ、エビ の柴づけ漁	河口近くで行われ、長さ1～1.5mほどの葉のついた枝や笹の束（柴）を一昼夜以上川に沈めておくと、ウナギや川エビが格好の隠れ家だと思い中にもぐり込む。そこで、獲物が落ちないように慎重に柴を水際まで上げ、たも網をあてがい揺すり落とすという仕組みである。
		火振り漁、友釣り、ノボリオトシ漁、ウナギのヒゴ釣り、ウナギのスズクリ、ウナギのコロバシ、ウナギのイシクロ、ハエ縄漁、エビ玉漁、カノウエ漁、テヌイエ漁、他


養殖業

場所	名称	概要
高知県 中村市	アオノリの真 養殖	水と潮水が混じる地に育つ、といわれるアオノリは、四万十川下流中村市で古くから栽培されてきた。12月～3月まではアオノリ、そしてアオサが3・4月に採取された。
		
		(資料：国土庁「水の郷百選」)
鳥取県 関金町	ニジマス養戦 殖	後造林等積極的に行うとともに、谷間の湧水を利用したワサビの栽培は各集落で行われ山間の開けた台地では椎茸、手を切るように冷たい沢水が大量に流れる下手ではイワナ、ニジマスの養殖が行われている。
		
		(資料：鳥取県関金町)

次頁へ続く～養殖業

場所	名称	概要
静岡県 大井川 流域	魚の遡上	<p>大井川には昔から鮎やウナギが遡上してきていた。ところが、河口域での盛んな砂利採取のために、河口床が下がり、川水の被影響海岸が大幅に縮小した。この結果、河と海とのつながりが変化し、遡上魚である遡上が川の入り口部分で阻まれ、アユやウナギ等が大幅に減少した。</p>  <p>(資料：㈱三和総合研究所 作成)</p>
北海道 標津町	鯉の生産地	1700年代、後期の江戸時代から、鮭や鯉を獲る「場所」として拓かれ、今日では「日本一の鯉生産地」としての地位を得るに至った。鮭は言うまでもなく、湧き水の多い清流で産卵し、ふ化した稚魚も清流を下って海へと達し、往復1万キロの旅を経て、約4年で「母なる川」に帰る。
新潟県 朝日村	鮭の養殖	三面川では、昔から鮭の養殖を実施し、生活の資金源としていた。
新潟県 新穂町	鱒の養殖	当地域では加茂湖という汽水湖があり「かき」の養殖が産業の一つとなっている。
長野県 佐久市	錦鯉の養殖	市内一部地域では、江戸時代に豊かな水を利用して水田養鯉を行っており、遠くは江戸・草津までも桶を担いで出荷したとされる。

棚田

場所	名称	概要
新潟県 小千谷 市	魚沼コシヒカリ	小千谷市は日本一の大河信濃川が市の中央部を流れ、また県内でも有数の豪雪地帯であることから、その大量の雪は豊富な地下水となり、湧き出した水は日本一の錦鯉産業を育ててきたほか、魚沼コシヒカリ、清酒、米菓など様々な特産品を生み出している。
高知県 梼原町	千枚田	<p>町内神在居地区にある棚田は「耕して天に至る」といわれ、文字通り、石を積んで作られた棚田が険しい山の上の方まで続いている。棚田は、いつしか「千枚田」と呼ばれるようになった。ところが、地域の過疎化と米の価格の相対的な低迷により、作り手がいなくなり、最近では耕作放棄も見られるようになった。しかし近年千枚田オーナー制度による都市との交流等により保全活動も行われつつある。</p>  <p>(資料：高知県梼原町)</p>

次頁へ続く～棚田

場所	名称	概要	
熊本県 菊池市	菊池米	菊池は江戸時代には「菊池米」として、全国的に有名であり、菊池川下は俵が積み込まれ、中央との取引が行われていた（中世の頃は中国との交易も行われていた）。	
長野県 更埴市	姨捨の棚田	<p>「日本の棚田100選」にも認定され、姨石、長楽寺、四十八枚田地区は国指定名勝。市ではこの棚田を保全し棚田の景観を将来に引き継ぎ、都市と農村との交流、地域活性化のため、平成8年度『棚田貸します制度』を発足させ保全につとめている。</p> <p>（資料：http://azumino.cnet.ne.jp/country-road/koshoku/index.html）</p>	
宮崎県 日南市	酒谷の棚田	同市の酒谷地区では、棚田を現在でもそのままの形で残っており、農水省「日本の棚田100選」にも選定されている。春にレンゲ祭りなども開催し、県内外から多くの観光客が訪れ、現在では、地域振興の一端を担っている。	


地場産品

場所	名称	概要	
静岡県 かわね郷	川根茶	静岡県大井川流域かわね郷では、大井川の朝霧を利用して茶の栽培が盛んである。	
長野県 安曇野 豊科町 穂高町 明科町	わさび田	安曇野の一带は北アルプスの雪解け水からなる河川と地下水に恵まれた地域である。特に犀川、穂高川、高瀬川の合流地点は一大湧水郡であり、水温変化のない湧水を利用したわさびの栽培は生産量日本一を誇る。表流水は水田に、地下水はわさび田に、排水はニジマス養殖に利用されている。水が循環利用されている。	

次頁へ続く：地場産品

場所	名称	概要
高知県 吾北町	コウゾ・ みつまた さらし場	本村は川を利用したコウゾ・ミツマタの栽培が盛んであった。蒸して剥ぎそいだ皮を、川の「さらし場」で白く洗っていた。また、水車は米をつき、キビ・ソバ粉等をひくなど、水は暮らしに欠くことのできないものだった。

手漉き和紙


場所	名称	概要
長野県 長門町	立岩紙	当町は江戸時代から手すき和紙（立岩紙）が盛んであった。紙すきには原料のこうぞをさらすため清流が必要で、当町の中央を流れる依田川沿いに数多くの「さらし場」があった。 
岐阜県 坂内村	製紙業	明治の頃、坂内では製紙が盛んで、各地区には「こど」と呼ばれる地下水を利用した、紙をそろえた「場」があり、現在では洗い場等として利用されている。
熊本県 三加和 町	和紙生産	江戸時代から明治にかけて和紙生産を主産業として栄えた町である。最盛期には850軒の和紙農家を有し、明治12年には、熊本の和紙生産の65%を占める一大産地として隆盛をきわめた。当時、町を流れる和仁川・十町川沿線には和紙の原料である「コウゾ」の洗い場・作業場が至るところに設けられていたという。生産活動や伝統工芸の拠点として水文化の栄えた町である。
岐阜県 河合村	山中和紙	富山県との境にある豪雪地帯に伝わる山中和紙。平安時代から行われてきている伝統工芸である。「雪晒し」によって白さが増すといわれる。
鳥取県 佐治村	因州和紙	因州和紙の産地であり、佐治川や谷川の水を使って現在も和紙がつけられている。
鹿児島 県蒲生 町	蒲生和紙	藩制時代から今に続く蒲生和紙の製造技術が伝承されている。昨今までの紙漉きでは、紙料の製造段階で、原料となるカジの木皮を煮た後のアク抜きとして後郷川の流れを利用していた。

(資料：長門町教育委員会「長門町の文化財」)

その他産業（伝統工芸・観光業ほか）


場所	名称	概要
福井県 小浜市	めのう細工	若狭めり、めのう細工には、水はなくてはならないものである。
島根県 横田町	かなながし 鉄穴流し	たたら製鉄が盛んな斐伊川では「鉄穴流し」と呼ばれる水流を利用した比重選鉱による砂鉄採取が行われていた。

次頁へ続く～その他産業

場所	名称	概要	
和歌山県かつらぎ町	川上酒	当地域の用水は、かつては、和泉（いずみ）山脈の伏流水を利用した「川上酒」を支えていた。	
岐阜県馬瀬村	鮎釣り	馬瀬川の鮎づりは戦前、戦争直後は、釣マニア、村在住の一部の間で行われていた。やがて観光漁川に転換。今も全国的な鮎釣り場としてにぎわいをみせている。	
岐阜県中津川	木曾川の観光船	市内を東西に貫流する木曾川の両岸は名勝地で明治の中頃から観光船が盛んに運行されていた。	




(資料 : <http://www.grn.mmtr.or.jp/~mizumizu/130.htm>)

洗い場

場所	名称	概要	
富山県黒部市	清水	生地地区では昔から湧き水を利用し、町内毎に共同洗い場として活用されている。湧水は「しょうず」と呼ばれて、今も果物を冷やしたり、洗濯などに利用されている。	
三重県飯南町	舟	谷水を引いて「舟」という洗い場に貯め、野菜を洗ったり洗濯に使ったりしていた。	
佐賀県多久市	カワド	集落の要所には井戸・カワド（洗い場）・風呂場等の共同使用場があったが、水道等の整備に伴い一部を残すのみとなり、昭和40年代前半頃、水のみ場・共同井戸・風呂・洗い場等は衰退した。	

(資料 : 国土庁「水の郷百選」)

次頁へ続く～洗い場

場所	名称	概要
岐阜県 八幡町	カワド	<p>当地域では、承応元年（1652年）の大火をきっかけに、藩主遠藤常友が城下町の改造を行い、北町の防火対策として柳町用水、南町の灌漑用水として寛文水路（島谷用水）を開き、さらにその水を分水する小水路を張り巡らせ、多様な水利用システムを構築した。今もなお共同のカワドは洗い場として利用されている他、水路ごとに清掃当番が決められて、住民により日常管理が行われている。</p>
大阪府 岸和田市	ぬきず 抜水	<p>明治18年の大旱魃の時に、作才町を流れる川の上流の川底に穴のあいた土管を伏せ、湧き水を各家や共同の井戸に引いたことが始まりである。「湧き水を抜いて各家や共同の井戸に引き込んだ」ことから「抜き水」が語源であるという。昭和初期には、岸和田製水会社が、この水を利用し水を製造していた。写真の右側の水槽に、やかんに入った麦茶が冷やされている。</p>  <p>(資料： http://www.osaka.ntt.ocn.ne.jp/topics/meisui/sakuzai/sakuzai.html)</p>
青森県 弘前市	「ダキ」	<p>戦後しばらくは市内各所に井戸や「シツコ（清水）」と呼ばれる洗い場があり、飲料、洗い場について水槽の区分が厳しく守られていた。通称「ダキ」と呼ばれ、水量が豊富で、元禄2年の法華堂建立以前から生活用水に利用され、現在も地域の簡易水道の水源となる。広い洗い場は、日常の洗濯、野菜洗い、水くみなどをする地域住民のふれあいの場である。</p>  <p>(資料：青森県弘前市教育委員会)</p>
岡山県 奥津町	あしふみせんたく 足踏洗濯	<p>奥津温泉では、吉井川のほとりの露天風呂で「足踏洗濯」が行われ、入浴とともに地域住民の洗い場として重要な役割を果たしている。古来より温泉地として栄えてきた。</p>  <p>(資料：岡山県奥津町)</p>
佐賀県 富士町	カワ	<p>台所内まで入り込んだカワと称する池や、集落内用水路には、洗い物をする所とに使用ルールがあった。</p>

次頁へ続く～洗い場

水車

場所	名称	概要
岡山県 津山市	桐の木水車	<p>勝部に、「桐の木水車」という米搗き水車がある。この水車は、地元の集落の「水車連中」で今も維持されているが、津山市民もその維持に貢献している。また、市内周辺には他にも紙すき水車や製材水車、揚水水車が現役で活躍している。</p>  <p>(資料： http://fp-mimura4.archi.kyoto-u.ac.jp/Suishu/main.htm)</p>
栃木県 田沼町	クルマ屋	<p>田沼町は清流に恵まれた町で、南部は伏流水が地表に現れる。この流れを利用して、江戸中期から昭和初期にかけて76基の水車（箱水車を含む）があった。主に水車業（クルマ屋）は、近隣の農家や米穀商を相手に精米・精粉を行った。</p>  <p>(資料： 栃木県田沼町)</p>
愛知県 鳳来町	ぼっとり	<p>明治時代、この地域では「ぼっとり」や水車で米や麦をついていた。ぼっとりとは八升の米の精白に二昼夜を要する精米機である。ぼっとりは、時間はかかったが、米の味が非常に良いと云われた。水量の多いところでは、水車をかけ、賃稼ぎをした。</p>
岡山県 笠岡市	尾板の水車谷	<p>笠岡市内を北流する尾板川の上流渓谷には、明治から昭和20年代まで数多くの水車があり、小麦粉から手延べそうめんやうどんが作られていた。当時「尾板そうめん」は、近隣の町村にも知れ渡っていた。</p>
岩手県 久慈市	桂の水車	<p>久慈市の山根地区では昭和55年まで形態が残されていた水車を調査資料を元に忠実に復元し「桂の水車」と名づけ活用している。</p>
兵庫県 佐用町	水車	<p>水車による精米、又こんにゃくの産地としてこんにゃくの製粉を水田により行っていた。</p>
富山県 城端町	水車	<p>昭和初期まで使用されていた40基ちかくの水車を復活させるため付加価値としてカラクリをつけた水車としてよみがえらせた。</p>
福岡県 犀川町	回転鋸による製材	<p>町域南部は英彦山系の豊かな水に恵まれ、林業が盛んだが、戦前まで水車を利用した回転鋸による製材が盛んだった。</p>
岩手県 遠野市	水車	<p>市内には6基の水車が現存しており、脱穀や製粉に利用されていた。現在では、伝統的な田園景観のシンボルとして観光の振興に寄与している。</p>

かっぱ伝説


場所	名称	概要
熊本県 多良木 町	かわんたろう	球磨川とその支流には、「こぶち」「わんぶち」等と呼ばれている淵が点在する。淵の、深く暗い川底には、得体の知れない何かが棲み、人々を飲みこむと伝えられていた。これは「水神さん」「かわんたろう」等と呼ばれ「水を恐れ大切にす」水文化の象徴的な存在である。
熊本県 五木村	ガワツパ	「弘法大師の話」、「大蛇の話」、「祇園池のクズと片目の魚」等。また、俗信としてヤマノタロウ・カワノタロウ・シエコ・ガワツパ等がある。
青森県 木造町	すいこさま 水虎様	稲作民族の祖先は、水に関心を持ち、水の恵みを祈り、災いが起こらぬよう念じていた。水の主は龍でありカッパであった。古田放川は子どもたちにとっては格好の水遊びの場である一方、溺死者がよく出た。子どもの水死は、カッパが子どもを引き込むためと信じられていた。子どもの水死を防ぐためにカッパを祀ろうと、特に淵の近くにカッパ、即ち「水虎様」が祀られた（水霊信仰）。江戸時代に入り町民文化が栄えると、この水霊信仰が廃れ、カッパは相撲好きでいたずら好きという人間くさいものに変化していく。踊るカッパ、酒盛りするカッパが戯画化され、焼き物などにもなって観光みやげに販売されるようになった。近年、当町の木造りでは、祭りである「カッパ祭り」が行われるようになっている。

滝伝説ほか


場所	名称	概要
福岡県 北九州 市	菅生の滝	<p>小倉南区の南端、道原の谷の奥に約30mの高さを誇る「菅生の滝」がある。夏になると、涼を求める市民などで大変賑わう場所である。この滝の名前には伝承がある。</p> <p>昔、里長の娘との身分違いの悲恋を哀しんで滝に身を投げた百姓の青年は白蛇に変化した。蛇の祟りか、熱病に冒された娘は、夜毎夢に見るこの滝に行くことを望んだ。家族もそれ以外の術はないと、その顔に黒く墨を塗って滝に向かわせた。しかし娘は滝の飛沫で墨が落ちたのに気付かず、美しい素顔が滝壺に映った瞬間、滝の主は娘を水底に連れて行った。それ以来、この滝を素顔の滝と呼ぶようになり、呼び名は同じまま、「菅生の滝」と書かれるようになったという。</p> <p style="text-align: right;">（資料：北九州市小倉南区役所まちづくり推進課）</p>
香川県 丸亀市	垂水地区	市内の垂水町は安楽寺にある時雨の松からいつも水が滴り落ちて水が豊かであったため、垂水という地名がついたといわれる。
岐阜県 坂内町	夜叉ヶ池伝説	「夜叉ヶ池」は、山の稜線上にある神秘的な池である。池の岩壁から滝が落ちているが、今だ水が溜れたことがない。そのため古くから雨乞いの対象となっていた。夜叉ヶ池には、雨を降らせてもらった代りに、池に住む竜神に嫁ぐ「夜叉ヶ池伝説」がある。娘は竜神に連れられ、揖斐川を上る。その名残が、娘の実家があるといわれる神戸町から、揖斐川町、藤橋村、坂内村に点在している。




弘法伝説

場所	名称	概要
神奈川県南足柄市	弘法のつき水	<p>ある暑い夏の日、荻野の鈴木さんのお宅に一見乞食坊主と思われるようなお坊さんが訪ねてきた。機織りをしていたおばあさんが出てみると汗を流しながら「お水をいっぱいお恵み下さい」という。おばあさんは、気の毒に思い、お坊さんを家に招き入れ、自分は裏口から大急ぎで小径を下り、小川まで行って清水をくんで、坂道を登ってきてお坊さんに水を差し出した。お坊さんはたいそう感激し、「これからは水にこまらないようにしてあげましょう」と屋敷の西の端に、持っていた錫杖を突き刺し呪文を唱えた。すると杖の先から清水が湧き出した。お坊さんは実は弘法様で、この清水は「弘法のつき水」と呼ばれるようになった。今も鈴木さんの裏庭には水がこんこんと湧き出している。</p>  <p>(資料：神奈川県南足柄市)</p>
栃木県田沼町	弘法岩	<p>その昔、大字下彦間に旅の僧が通り、一杯の水を求めたところ留守の老人は初夏の水不足を理由にこれを断った。別の農家に立ち寄った所、家にいた老婆は矢の窪という所まで行き、冷たい清水を汲んで与えた。旅の僧は非常に喜び、立ち去った。数日たったある日、再び僧が現れ、彦間川のほとりの岩に立ち、呪文を唱えながら錫杖を枯れた川底に突き刺すと穴から水が湧き出し、泉となった。その立った岩を弘法岩という。</p>
福岡県甘木市	水が枯れる川	<p>冬場になると、水が枯れる川があり（伏流）民話もある。（旅のお坊さんが川で大根を洗っていた人に一本くれとிட்டが、あげなかったことから、その時期になると水を流れないようにしたという民話）</p>

雨乞い

場所	名称	概要
香川県仁尾町	雨乞い踊り	<p>大干ばつに襲われた寛政11年（1799）、仁尾のため池の水は枯れ、井戸の水も底をつき、稲は今にも枯れようとしていた。毎夜続く竜王神に祈る雨乞いの神事もむなしく日照りが続いた。百姓たちは、藁で大きな竜を作り、伊予の黒蔵淵からくんだ水をかけて和蔵と共に祈った。すると雷光と共に大粒の雨が降りはじめた。以後仁尾町では140年間この神事が行われたが、昭和14年に途絶えた。昭和63年、50年を経て瀬戸大橋博覧会開催時に復活し、現在に至る。</p>  <p>(資料：http://service.kagawa-net.or.jp/niocho/nio2.htm)</p>

次頁へ続く：雨乞い

場所	名称	概要
岐阜県 春日村	雨乞い踊り	<p>霊峰「日本七高山」の一つ伊吹山連峰を源とする 粕川は西美濃地域の農業の水嚮として、古来より重要な役割を果たして来た。その一つとして春日の太鼓踊りがある。「往昔長い日照（旱魃）により農作業ができず困り果てた百姓衆が当地に伝わる雨乞い踊りを懇願し踊ったところ慈雨がいった」と今も語り継がれ、現在も村内5地区でその踊りが連綿と伝えられている。</p>  <p style="text-align: right;">（資料：岐阜県春日村）</p>
香川県 琴南町	念仏踊	<p>香川県は古来より雨の少ない県であり、県内各地には数多くのため池がある。水稲栽培のためには、ため池だけでは不足であったのか、各地に雨乞いのための踊りが伝統芸能として残っている。琴南町は一級河川「土器川」の上流に位置している。また、香川県で2番目に高い山である大川山（だいせんざん）に古来からふもとの地域の信仰を集める大川神社がある。この神社では、雨乞いのために「大川念仏踊り」踊られており、現在でも、保存会により大切に保存、伝承されている。</p>
長野県 上田市	たけのぼり 岳の幟	<p>別所地区は全国的に降水量の最も少ない地域であり、古くから干ばつに遭ってきた。室町時代後半永正元年（1504年）大干ばつのため田畑が干上がり作物が枯死寸前となったため、村人は近くの夫神岳の九頭権現に祈りを捧げた。すると、にわか大雨が降り田畑を潤したという。以来、人々はお礼として布の幟を奉納している。祭礼は毎年7月中旬に行われる。国の選択無形民俗文化財。</p>
福岡県 犀川町	貴船社	<p>祭礼のほとんどが水に関するものであり、神社の中でも最も多い名前は「貴船社」である。</p>

五穀豊穰・大漁祈願・水恩感謝

場所	名称	概要
福岡県 北九州市	和刈神事	<p>県指定無形民俗文化財に指定されているこの行事は門司区の和布刈神社に伝わる。毎年旧暦元旦の午前2時頃、干潮の頃を見計らって神職が境内の石段から海峡に入り、ワカメを刈り取り、神前に供えるというものである。昭和20年頃までは秘儀として、庶民は見る事を許されなかったという。神代の昔、神功皇后が武運と航海の安全を祈願してワカメを神前に供えたという故事に由来する。</p>
大分県 米水津村	こくやの水神様	<p>養福寺の本堂の裏にある「こくや」の水神様は霊験あらたかで、この水神様に願かけにお参りするときには、1人で参らなければならず、途中他人に顔を見られると顔がかなえられないといわれている。</p>
静岡県 川根町	松明ながし	<p>豊作祈願の催事で、大井川に流した藁で作った舟をし、その上で松明を灯し、それが消えずに下流に流れると豊作、途中で消えてしまうと凶作で忌み嫌った（朝から作り出し、夜中に火をつけて流す）</p>
沖縄県 竹富町	水への感謝の祈り	<p>国の重要無形民俗文化財に指定されている「西表島の節祭」の行事の中で、3日目に集落の水源地において水恩感謝の儀礼が行われる。</p>

次頁へ続く～雨乞い

場所	名称	概要
佐賀県 呼子町	五穀豊穰・ 大漁祈願の 祭事	町内の小友地区で旧暦6/14-15の両日に行われる祇園祭は高さ12m重さ3トンの山笠をかついで海の中を練り歩き、八坂神社に疫病除け、五穀豊穰、大漁祈願を行う。 
静岡県 かわね 郷	平田のたる ながしほか	名だたる暴れ川である大井川は、「道」として、木材流送砂金採取（接岨峡）などの恵みも与えていた。人々は川の恵みと安全を願うとともに、疫病退治を祈願するために、松明に火を付けて川に流す行事を始めた。 献灯先は津島神社（愛知県）。祀神はスサノオノミコトであり、疫病を防ぐといわれる。かわね郷各地区で行われ、戦時戦後も絶えることなく流されていたが、現在では、「平田のたるながし（本川根町）」「平谷の流したい（中川根町）」「石風呂のたい流し（川根町）」などいくつかが残るだけとなった。 


（資料：佐賀県呼子町）

（資料：静岡県中川根町）

滝信仰

場所	名称	概要
北海道 西興部 村	滝信仰	興部川上流に「行者の滝」があり、この滝にうたれ病を克服した言い伝えがあり、現在その伝承により、信者などが、行者の滝祭を実施している。
福島県 三春町	滝信仰	当町の南側を流れる大滝根川には上流より三階滝・不動滝・御前滝などの名勝地があり、それぞれの滝に伝説が残されている。


神の交流

場所	名称	概要
長野県 諏訪市	おみわたり 御神渡り	<p>諏訪湖が全面結氷すると、大音響とともに氷が割れ、その跡が高く押し上がり御神渡りができる。これは諏訪大社上社男神が、下社の妃神の許に通った道跡であるといわれる。八劔神社では、御神渡り拝観の儀式が行われ、御神渡りの方向により、吉凶が占われる。</p>
		 <p>(資料：長野県諏訪市)</p>
石川県 羽咋市	御座船の舟 わたり	<p>羽咋神社の秋季祭礼の14日夜、羽咋神社から旧社ともいわれる川原町八幡社へ渡御するため、長者川を二艘の御座舟で舟わたりをする。約150mの近距離を2時間余りも青年達により行きつ戻りつする。俗に石撞別命が女神様へ会いに行くとか、悪魔退治の式をかたどるといわれる。11時頃川岸に着け、御輿をかつぎ境内に入り、祭りの後、長者川を下って帰社する。</p>
		 <p>(資料：石川県羽咋市)</p>
高知県 中村市	不破八幡 宮大祭	<p>10月10日は不破八幡宮並びに一宮神社にかかわる「神様の結婚式」と称される神事が行われる。</p>

楔ぎ・厄除け・鎮魂

場所	名称	概要
静岡県 中川根 町	平谷の流し たい	<p>「流したい」は、大井川が堰き止められて鉄砲水として流れ出て氾濫し、さらに疫病が流行ったときに、愛知県津島大社に奉納をはじめたのがきっかけである。当時「流したい」はどの地区も行っていたが、戦中も耐えることなく続いているのは当地域のみである。過疎化に伴い、隣接する瀬田地区と協同で維持している。</p>
岡山県 笠岡市	北木島の流 し難	<p>笠岡諸島最大の島・北木島の大浦海岸では、旧暦3月3日に、麦藁の船に紙雛を乗せて海へと流す伝統行事が行われる。和歌山県の淡島明神信仰にまつわる行事で、女性の厄よけと言われる。</p>

次頁へ続く～楔ぎ・厄除け・鎮魂

場所	名称	概要
新潟県 栃尾市	寒精進	<p>12月下旬、一年の災厄を水ごりで清め新年を迎える行事。江戸時代から続く伝統行事。</p>  <p>(資料：新潟県栃尾市)</p>
和歌山 県大塔 町	流れ施餓鬼	<p>大きな麦わらの舟に神仏を乗せ、火をつけて川に流す珍しい精霊流し「流れ施餓鬼」。大塔村下川上の日置川支流・安川で行われる。文化6年(1809年)、山で伐採した木の丸太流し作業の犠牲者の霊を慰めるために始められたといわれる。一時中断していたが、伝染病が流行した明治6年(1873年)から復活した。現在では上村地区の新仏を送る伝統行事として継承されている。</p>

海神・龍神

場所	名称	概要
青森県 木造町	十和田様	<p>松原の十和田神社はご神体が竜であり、竜神様と呼ばれている。水虎様と同様水霊信仰が出发点である。竜は湖に住み、川となって滝になり急流になり海に注ぐ。そして雲となり昇天し、大地に恵みの雨をもたらし、怒れば雷雨となって大洪水をおこすと信じられていた。十和田様は全県の神社や寺などに多く付置されて祀られており、必ず池を伴っている。またここでは、水の恵みによって豊作を願い、豊凶を占う「散供(さんご)うつ」とよばれる占いが行われていた。</p>  <p>(資料：青森県木造町)</p>
青森県 板柳町	海童神社	<p>板柳町の船岡は、岩木川一の良港であった。「藩祖為信が文禄2年当時の朝鮮」に軍を出している豊臣秀吉と会うため、十三港を経て日本海を航行するにあたり、先ず板屋野木村船岡に兵糧積立しの河港を設けた。現在ある海童神社は、海神を勧請して海上航路安全の祈願所とするために建立された。</p> <p>(資料：青森県板柳町)</p> 

ため池

場所	名称	概要
香川県 丸亀市	ため池文化	<p>讃岐は古くから水不足にまされ ており、そのため農業用、飲料 水用にため池を多く作り利用し てきた。配水さん、水守を中心 とした伝統的な水利慣行システ ムを持つ。</p> <p>(資料：ミツカン水の文化センター 「水の文化」)</p>



ダム

場所	名称	概要
青森県 川内町	かわうちダ ム	<p>川内川上流治水ダムの「かわ うちダム」が平成6年度 完成、現在は周辺環境が整備さ れ(道の駅など)、親水スポッ トとして人々にいこいの場とな っている。</p>
福岡県 甘木市	水の文化 村	<p>2つのダムから市内と福岡市へ水を送っており、「福岡の水がめ」と呼ばれている。ダム湖に「水の文化村」という施設を作り、水ついて広く情報提供を行っている。</p>




(資料：青森県川内町)


文化財

場所	名称	概要
山梨県 韮崎市	朝聴堰 徳島堰	<p>水不足を補うための朝聴堰、又中巨摩地区に水を引くための徳島堰は、江戸時代より通水されている。</p>
佐賀県 多久市	羽佐間水 道	<p>江戸時代頃より治水・灌漑用として築かれた羽佐間水道があり、現在も立派に用水路として活用されている。</p>

次頁へ続く～文化財

場所	名称	概要
青森県 むつ市	アーチ式石造ダム	<p>明治41年、海軍大湊要港部への水供給の必要性からアーチ式石造ダムが建造された。昭和21年には軍から町に移管され、住民の水道となった。昭和51年には実際の役割を終えたが、今も「水源地」の名を残し水源公園の中にある。また、丸の内ビルを設計した桜井小太郎海軍技師の設計によるもので、日本の水道史においても貴重な遺構であることを東大の村松貞次郎教授が市に進言、保護を要請したことで、一部埋め立てられる計画が再検討され、現在の形となった。平成5年に県重宝に指定された。</p>  <p>(資料：青森県むつ市)</p>

地域の歴史の象徴

場所	名称	概要
滋賀県 近江八幡市	背割下水	<p>古くから生活用水の確保が困難であったため、水源地に親井戸を設け、そこに貯めた水を竹管によって共同井戸や各戸の取井戸に配水する「古式水道」が、町民の自主管理の形により発達した(日本最古)。また、「背割下水」と呼ばれる排水路が豊臣秀次によって整備されていた。</p>  <p>(資料：滋賀県近江八幡市)</p>
宮崎県 山崎町	前田正名の用水路	<p>明治時代に前田正名という人が丸谷川より水を引き用水路を完成させた。用水路は彼の名前を取り前田用水路と呼ばれている。記念碑も作られており、郷土の先覚者として、現在もその功績が称えられている。</p>
宮崎県 西都市	児玉久右衛門の堰	<p>穂北地区は水利に乏しい地域であったが、江戸時代に住民の窮乏を見かねた児玉久右衛門が私財を投じて堰を完成、その後、穂北地区は豊かな土地となった。</p>
千葉県 大多喜町	大多喜水道	<p>当地域には、江戸時代、大多喜藩治政下に、飲料水ならびに灌漑用水の確保を目的として県下初の「大多喜水道」が建設された。記録によれば、明治2年から同3年にかけて、藩をあげての大工事が行われ、近隣の人々を人足として雇い、大多喜藩知事は米を、そして町方の人は金子を援助したと記録されている。</p>

次頁へ続く～地域の歴史の象徴

場所	名称	概要
新潟県 柏崎市	血の口	柏崎平野の田尻地区と北鯖石地区の接点「血の口」では、流血惨事に至る水争いが繰り返されていた。「水守」が相手方に捉えられ陰惨な仕打ちを受けるなど、水を巡る集落間争いは半ば行事のように繰り返された。1666年、群奉行が仲裁する形で「よろい堰」が建設された。しかし後に洪水で決壊、水争いは続いた。そして水争いの長い歴史に決着をみたのは1959年、藤井堰建設による。
兵庫県 佐用町	共同利用 水路	江戸時代に作用川の支流より水を引き、播磨利神城下の町屋の形成のため上水と下水とを巧妙に交差させる水路をつくり、共同使用の水道を作っている。当時の技術力の高さが偲ばれ今も大切に保存活用がなされている。
新潟県 佐和田 町	かけなんだ	当地域では、江戸時代に山田川上流に金検断（かなけんだ）という取水施設がつけられた。これは、下流の各集落に農業用水を送る際、公平に分配されるよう金具を取り付けた板を配して水量を調節するものである。

水資源

場所	名称	概要
新潟県 栃尾市	杜々の森 湧水	杜々の森から湧き出る清水。古来、女人禁制の霊地として崇拝され男性といえど木を伐採すると馬頭人身の神が現れ呪術で死に追いやったと伝えられている。 (資料：新潟県栃尾市)
広島県 知名町	あしきよ ら湧水	芦清良（あしきよら）という字の中心部に湧水がある。字名の由来は「足が清らか」との説もあり、住民は生活に利用している。樹齢数百年の巨木が林立する。




イベント

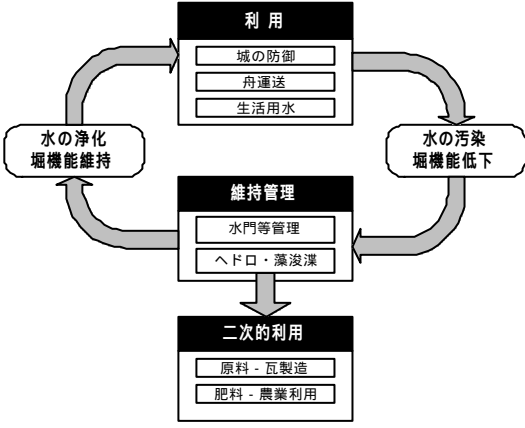
場所	名称	概要
山梨県 河口湖 町	河口湖上祭	河口湖畔では、古来から7月31日にみそぎ流しが行われていた。この祭りをヒントに大正年間に島津公来籠の歓迎に合わせ始めた「煙火」が、今日の河口湖上祭の発端となっている。 (資料：山梨県河口湖町)

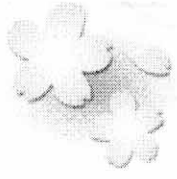
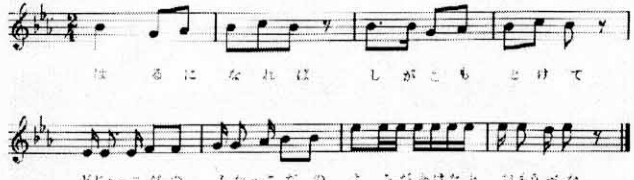


管理組合

場所	名称	概要
兵庫県 北湊町	田主	ため池は貴重な農業用水として現在も活用され、水路は田主とよばれる管理組合により厳重に管理されている。
長崎県 郷ノ浦町	水当番	島嶼で大きな河川が少なく農業用水はため池により確保され、その水利用については毎年「水当番」をたてて有効に使用する。
香川県	配水さん	<p>水がもとより少ない香川県では、ため池の配水ルールは、受益地域を5ブロック程度に組んで輪番制で順番に配水する「番水制」である。湯水時の水管理をあわせて行うのが各ブロックの「水配さん」である。</p>  <p>(資料：ミツカン水の文化センター「水の文化」)</p>
青森県 岩崎村	堰管理組合	天和の頃、笹森勘解由左衛門建房の指導によって開田がなされた。この開拓に数年を要し、特に笹内川支流新谷沢から約4.2kmの灌漑用水路の開せきがなされ現在も40町歩を潤している。管理及び補修は笹森堰組合で行っている。
広島県 豊栄町	柵	当地域は江戸時代より農業が盛んであった。農業を行う上で欠かせなかったのが農業用水を確保する事であった。他地域では「水番」をおき、用水の配分などの管理を行っていたようだが、本地域では「水番」を置かずに、水を配分するための「柵」を要所要所に配置し、その「柵」を利用し水を常時均等に配分していた。

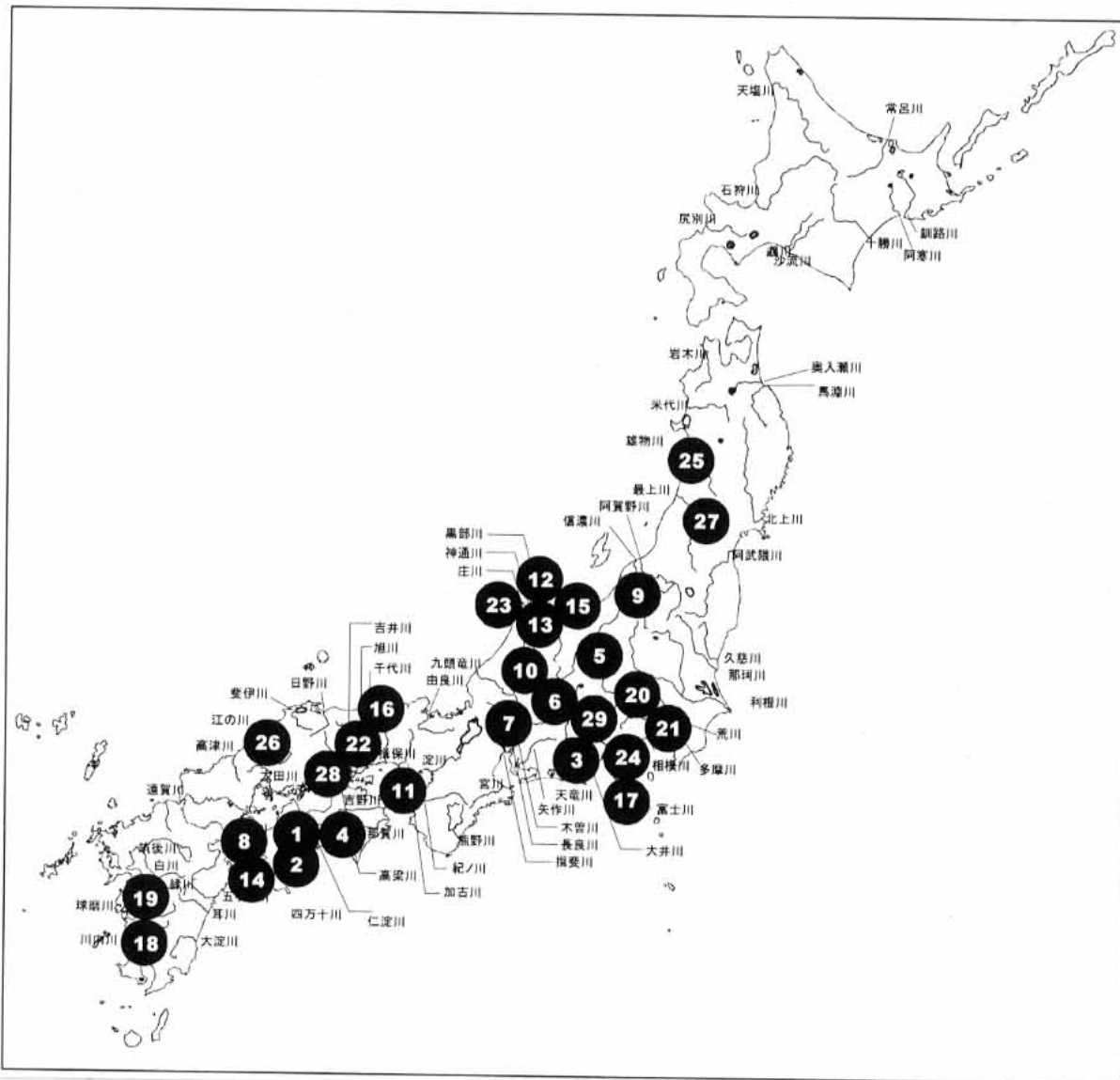
その他

場所	名称	概要
滋賀県 近江八幡市	八幡堀	<p>豊臣秀次により築城された八幡城を囲む八幡堀は、豪としての役割の他、琵琶湖と八幡町を結ぶ水路として発達し、商業発展の大動脈となる。堀沿いには瓦工場が建ち並び、黒光りする「八幡瓦(鬼瓦)」が生産され、京都・奈良の神社や仏閣に納められていた。また瓦にはヘドロや藻が、堆肥として極めて貴重であったため、若衆は、田舟を使い「底ざらい」を行った。藻と共に汲み上げられた黒い土は、乾燥して八幡瓦の原料となる。</p>  <p>(資料：(株)三和総合研究所 作成)</p> <p>こうした自主的な浚渫は、農業の衰退、堆肥の開発により必要性も薄れ、昭和初期に衰退し、土の入手は次第に困難となった。瓦は衰退し、堀にはヘドロがつもっていった。現在、瓦屋は10件のみで、協業組合化して浜辺に立地。瓦は白い。</p>
三重県 熊野市	水販売	宝暦の水槽石(4基)が残っている。熊野市木本町周辺は昔から水の基だ乏しい地域で、水槽石を使い、旱魃の時は水販売したこともあったといわれている。

場所	名称	概要
東京都 隅田川	花	<p>隅田川の水が澄み、白魚が泳いでいた当時の隅田川周辺の桜の美しさ、のどかさを詠いあげた詩である。明治33年11月に発行された組曲「四季」の春の部にあたる曲で、日本人創作の詩にドレミファソラシドの西洋音階によって日本人が挑戦した高水準の作品と言われる。(関東地建川の歌研究会「川の歌」より)</p> <div data-bbox="678 286 1369 721" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">花</p> <p style="text-align: right;">武島羽衣 作詞 滝廉太郎 作曲</p> <p>1. 春のうららの隅田川 のぼりくだりの 船人が 櫻のしずくも 花と散る 眺めを何に 喻うべき</p> <p>2. 水や曙 露あびて われにもこのう 桜木を 見ずや夕暮 手をのべて われさしまねく 青柳を</p> <p>3. 錦織なす 長堤に 暮るれば上る おぼろ月 げに一刻も 千金の 眺めを何に 喻うべき</p>  </div>
長野県 木曾川	木曾節	<p>「御嶽山節」が歌い整えられて「木曾節」になり、大正年間、御嶽山の昇り口、木曾福島町が盆踊唄として踊りの手を着け宣伝してから一般に知られるようになった。それまでは、「仲乗りさん節」と呼ばれていた。御岳教の修験道で人間と神の真ん中において憑祈禱する行者を「中憑さん」といい、日常は筏流しの労働に従事していた。(関東地建川の歌研究会「川の歌」より)</p> <div data-bbox="678 857 1369 1292" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">木曾節</p> <p>井木曾のナ 仲乗りさん 木曾の 御岳 ナンチャラホイ 夏でも 寒い ヨイヨイヨイ 裕ナ 仲乗りさん 裕 ナ やりたや ナンチャラホイ 足袋を 添えて ヨイヨイヨイ</p> <p>井裕 ばかりは やらせも せまい 禰祥 仕立てて 足袋を 添えて</p> <p>井木曾の 名木 檜に 花柏 杜松や 豆檜に 高野槇</p> <p>井木曾の 名物 お六の 袴は 解きし 前髪 止めに 差す</p> <p>井心 細いぞ 木曾路の 袂は 笠に 木の葉が 舞い 掛かる</p> <p>井三里 笹山 二里 松林 嫁御 良く来た 五里の 道</p> </div>
秋田県	どじょっこふなっこ	<p>昭和11年の春、岡本敏明は、玉川学園の中学生30人を連れて秋田県に演奏旅行に出かけた。秋田県金足西小学校による歓迎会の席上、中道松之助先生が「このあたりの唄を聞いて下さい」と秋田弁で朗詠風の唄を歌った。それがこのユーモラスな歌詞であった。岡本はこの詩に対し、小学生にも歌える合唱歌とし「どじょっこふなっこ」が誕生した。戦後には「青年歌集（歌声運動）」に掲載されたり、無着成恭の生活記録映画「山びこ学校」に挿入されるなどし、日本全国に広く普及した。(関東地建川の歌研究会「川の歌」より)</p> <div data-bbox="678 1435 1369 1870" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">どじょっこふなっこ</p> <p style="text-align: right;">東北わらべ歌 岡本敏明 作曲</p>  <p>は る に な れ ば し が こ も と けて</p> <p>どじょっこがの ふなっこだの よろがめけたと おひな</p> </div>

参考3：水文化の保存・再生活動

水文化の保存・再生活動団体一覧



地図上の丸数字は、次ページ以降のカッコの番号に対応)

(1) 先進的な取り組み事例

環境保全

場所	名称	概要
高知県 梶原町	複層林の整備	町内はスギ・ヒノキ林が多く、水源涵養林としてこれらの林を複層林化。四万十川下流域から水が減ったと言われており、上流としては水源涵養に務める必要がある。町の森林がほとんど針葉樹であり、山自体に保水力がないため、人工林に広葉樹を入れて複層林化することに成功した。(1)
高知県	四万十川方式	水田を手本に、自然浄化機能を活かした新しい水処理システム。産・学・官組織で構成された「四万十川方式水処理技術研究会」で実証・研究を進め、実用化した。木炭や枯れ木、石等の地域資源を再利用した充填材を使い、微生物を活用した水質浄化を行う。(2)
静岡県 川根町	かわね方式	「四万十川方式」を改良した自然循環方式の水処理技術を改良したもので、川根独特の「落ち葉」「炭」「牡蠣殻」を使用している。(3)
高知県 四万十川対策室	四万十川ファンド	高知県と流域市町村が討議し設立し、四万十川総合保全機構が管理し運用する基金。四万十川に関心をもつ全国の人々や企業に寄付を募り、清流保全に役立てようとするもの。寄付金は、住民参加による『四万十川クリーン大作戦』の支援や、長期的な森林保全事業支援、生活排水浄化活動支援、環境保全型地域づくりの支援などに使われる。また、寄付金ではなく、意見や情報を提供してくれる全国の人々を募る「四万十フレンドシップ倶楽部」が設立されている。(4)

水文化の保存・再生

場所	名称	概要
高知県 梶原町	千枚田オーナー制度	都会人に稲作の労苦や喜び、食の流通の仕組み等を知ってもらおうと同時に、棚田保全のための資金提供を受ける仕組み。都会人が年間4万円程度負担で棚田のオーナーとなり、週末等には農作業に従事してもらう。現在3年目で棚田は200枚程度。熱心なオーナーが10組いる。(1)
長野県 更埴市	おぼすて棚田貸します制度	日本の棚田100選にも指定され、市はこれを保全し景観を将来に引き継ぎ、地域活性化と都市と農村の交流を深めるため、「棚田貸します制度」を発足。「体験コース」は都会人に農作業を実体験してもらうもので、「保全コース」は都会人に保全に関する費用負担をしてもらい代わりに収穫米を送るもの。費用負担はどちらも1区間(100㎡)3万円である。(5)
長野県 木曽福島町	中乗りさん	木材運搬時に、藤ヅル等で木を縛り合わせた筏が利用され、その筏の上を前後左右に飛びながら筏を操る人を「中乗りさん」と呼んでいた。木曽福島町は、この「中乗りさん」の発祥の地とされる。また、当地では、日本を代表する民謡「木曽節」の中でも、中乗りさんが謡われている。 しかし、鉄道やトラック等交通手段の多様化、近年は林業衰退等も加わり、「中乗りさん」は約80年前に消滅してした。 しかし、平成7年7月の木曽踊り全国大会で、町内の有志「川遊び若衆」により「盛夏・木曽の中乗りさん in木曽川」が行われ、中乗りさんが復活した。(6)
岐阜県 八幡町	洗い場組合	町内の用水路の利用方法は、古くから住民の不文律となっており、明治時代より各地域住民が各戸送りの方法で清掃を続けていた。平成に入り、各区、各家庭のカワドをはじめ、用水の使い方を見直すことを目的に洗い場組合が結成された。これまで住民の不文律であった水路の利用方法がルール化されたことで、住民の意識啓蒙に繋がっている。(7)

水文化の保存・再生

場所	名称	概要
岐阜県 八幡町	こいのぼりの寒ざらし	八幡町の伝統工芸である藍染め（郡上本染め）により作られるこいのぼりは、川の水を使って寒晒しが行われる。現在は寒ざらしを川で行うことはほとんどなくなったが、昭和46年から毎年1月下旬～2月中旬に郡上本染めのこいのぼりの寒ざらしを一般公開するようになった。色鮮やかなこいのぼりが冬景色に映え、川を泳ぐ様を見るための観光客は年々増加傾向にある。町も、観光客の写真コンテストの開催などイベント化させ定着を図る一方、小学生を対象にした「ふるさと学習」により寒ざらし体験を実施。郷土の伝統工芸の伝承も図っている。(7)

地域活性化（産業振興）

場所	名称	概要
高知県 十和村	四万十ドラマ	中流域3町村で設立した第3セクターであり、会員制による産物販売を中心とした活動を行っている。「四万十ノベルティ」と名付け、地域のおばあちゃん達が造ったこだわりのみそや、完全な天日干しの「椎茸」、幻のコメといわれる「土佐ニシキ」高級山芋など四万十でしか収穫できない商品を開発・販売している。(8)
新潟県 小千谷市	おぢや利雪委員会	おぢや利雪研究会（平成8年12月設立）。「遊雪」・「雪貯蔵」・「雪商品」の研究・実施。雪蔵米・雪中貯蔵酒など商品の高付加価値化に成功している。(9)
長野県 明科町	ニジマスの養殖とわさび田	ニジマスの養殖には水温18～20度の清流を毎分20リットル以上必要とされている。同条件を満たしたわさび田にニジマスを放流したのが、当地域における養殖のはじまりであり、明科町では昭和15年には民間により開始されている。現在は、老朽化したわさび田の再生策として取り組まれている。また、穂高町では、ニジマスの養殖にわさび田の排水を利用している。同地域では、表流水は堰を利用して水田を潤し地下水が湧水としてわさび田に、そして、マス池は100%わさび田の排水を利用する（穂高町）など、水の循環的活用が図られている。(10)

イベント開催

場所	名称	概要
高知県 十和村	十和村体育会が行うこいのぼり渡し	十和村では、住民ボランティア団体である十和村体育会によって、毎年4～5月にこいのぼりの川渡しが行われている。これは、村内各家庭のこいのぼりを集め、四万十川に渡したワイヤーにつり下げたもので、昭和49年に開始されている。近年では、国内サミットなどの他、海外でのこいのぼりの川渡しも行われており、ナイアガラ滝でのこいのぼりの渡しも実現している。(11)
富山県 黒部市	水のコンサート&フェスティバル実行委員会	平成4年に、黒部市民らにより自主的に設立された委員会である。各家族ごとに、黒部川の周辺で水とふれあうための行事を企画している。親子で水にふれあうことにより、子ども達が、自分が生まれ育った故郷に愛着と誇りを持ち、親は、再度地域を見直すきっかけとなることを目的として、各種コンサートや、川に係わるイベントを企画・開催している。近年、同委員会は、黒部川の源流から河口までを音楽と写真で表現したCD「黒部川組曲」を発売している。このほか、黒部川のシンボルキャラクターとして「ウォー太郎」を作り、このウォー太郎が主人公となった絵本「黒部川ウォー太郎の旅」を出版したり、「ウォー太郎音頭」のCDの発売などを行っている。(12)
富山県 黒部市	黒部名水会	昭和62年に設立された。黒部市内の湧水並びに河川水の重要性を認識し、親水思想、自然愛護、観光面の普及を目的とした活動を展開している住民団体。「名水市民大学講座」「名水の郷親子ふれあいフェスティバル」の開催、名水茶会（春秋開催）などのイベント開催の他、名水と米のセット商品の販売などを行っている。(13)

啓発・教育

場所	名称	概要
高知県 西土佐 村	四万十学舎	廃校を利用した、社団法人の宿泊施設である。「宿泊した後がサービスの開始時点」という認識のもと、宿泊客に対して四万十川での泳ぎ方、川魚の採り方、木のみ採集などの自然体験学習をスタッフ7名で提供したり、地元住民の協力により地域の歴史や文化も宿泊客に教えるなど、都会と地域との交流を図っている。一方で、イノシシなどの地場の商品開発の研究や、高知大農学部への公開講座開催など、学舎オリジナルの地域研究活動、地域貢献活動を展開しつつある。(14)
高知県 十和村	四万十ドラマ	「自然の学校」と称し会員が四万十に遊びに来た時には四万十川流域住民が先生となり産業技術や生活の知恵などを教える。「森を見る学校」「川でエビとり」「薪を割って風呂に入る」「みそをつくる」など地域住民が先生となっている。一般の人に対して、理解しやすい形で直接流域の知恵を伝授し、地域を知ってもらうための活動を展開している。(8)
富山県 黒部市	くるべ水の少年団	子どもたちの水の関心を高め、水についての知識を深めることを目的として、市内の科学館内の発明グループが中心となり、市内の小学生・中学生をメンバーとする「水の少年団」が平成4年8月に設立された。黒部川や湧水の水質調査や水生生物の活動などの研究や滋賀県琵琶湖の水質調査を実施するなど、水、川にかかわる様々な実験をとおして「水」に対する意識の醸成を図る教室や観察会を実施している。(15)
鳥取県 智頭町	ちびっこ河川パトロール隊ほか	千代川上流に位置する智頭町では護岸整備等の進展により水と人との本来の関係が薄れつつあるため、もう一度生活空間としての河川を取り戻そうとの認識のもと、県、町、地域住民による「智頭町親水公園連絡協議会」が設立された。活動は「ちびっこパトロール隊」「渓流魚の放流」「河川新聞の発行」「環境フォーラムの開催」「河川清掃」などである。「ちびっこパトロール隊」は平成7年より開始しており、毎年町内の小学生から約30名程度の隊員を募集し、生物河川実態調査（河川の生物を採取、スケッチ等）、河川清掃・海岸清掃、千代川水質調査、視察（平成10年度は下水道公団で下水処理の流れを学習）等を行っている。活動を周知することで、子ども達を通じて町民が河川に対する関心を持ってもらうこと目的としている。現在、活動が千代川全域に広がりつつある。(16)
神奈川県 南足 柄市	あしがら文化広場	南足柄市文化会館が企画・主催する市民向けフォーラム事業である。平成6年以来、これまでに20回を開催している。 「地元再発見」と銘打ち、当地の歴史や遺跡等をテーマとする中で「水」にも着目し、「水」をテーマに3回ほど開催した。フォーラムの中では、水と生活等との関わりを取上げ議論、次に専門家から、地域の「水循環機構」に対する説明を受けた。その後、住民の側から「水源の森の見学」の要望が生まれ、これを実現した。 同会館の事業では、「水」を地域を知るためのツールと捉えている。 また「地域を知るという動機づけ」「水との関わり方の理解」「水循環機構の理解」「実体験」といプロセスが特徴である。(17)

行政域を超えた活動の展開

場所	名称	概要
熊本県 泉村他	清流氷川を取り戻す流域協議会	氷川流域5町村によって、清流氷川を取りもどす流域協議会が設立された。流域住民の森づくりをして伐採跡地を購入して天然林（広葉樹）の森として再生する活動のほか、環境学習会（シンポジウム）の開催や天然林の購入保全などを行っている。(18)
	氷川せせらぎの会（住民）	氷川流域では流域5町村の地域おこしグループが、「氷川せせらぎの会」を設立した。環境学習会を実施して水資源の保全に対する意識の向上を目指している。また、廃油せっけんづくりと使用の実践に取り組んでいる。(19)

行政域を超えた活動の展開

場所	名称	概要
荒川流域	荒川流域ネットワーク	1995年6月に行われた建設省の荒川上流工事事務所の河川懇話会をきっかけに結成された、秩父から戸田市までの流域の52団体からなるネットワークグループである。市民が主体となって、年1回の流域一斉水質調査と、毎秋開催の河川の水質浄化を目指したシンポジウムが主な事業である。これまでは、川越(入間川)、嵐山(都幾川)、寄居(荒川)、熊谷(荒川)、秩父で開催。この他、「荒川流域ネットワークニュース」の発行、単行本「荒川流域水質浄化大作戦-おかあさんたちは行く第1弾」(河川整備基金助成事業)水質マップなどの発行を行うとともに活動報告書も発行。さらに、参加団体への訪問、行政との折衝、河川見学、浄化施設への見学なども実施し、個別の団体では難しい幅広い事業展開を特徴とする。また、個人での参加者も増加しつつある。近年、荒川流域での検討を深める必要があるとの認識のもと、専門的プロジェクトチームを結成、水質、川辺環境、川下り、広報、情報戦略など展開。(20)
鶴見川流域	鶴見川ネットワーク	個々に鶴見川の再生運動に取り組んでいた上・中・下流の13住民団体が、再生活動については上下流交流」の必要性を感じ、1991年同ネットワークを設立。折しも、横浜市「地域展開型事業」の指定を受け、資金を得て、13団体が1年間鶴見川に関するリレーイベントを開催した。現在では43の鶴見川流域の市民団体が連携した大組織となっている。組織全体では「鶴見川流域人(新聞)」や「流域イベントカレンダー」の発行、イベント共同開催、行政とのパートナーシップ促進事業(イベントやセミナーの共同企画・運営)等を行っているが、通常は、各団体の活動範囲内で、川やまちづくり活動に対する提言や「知水活動」等を実施。(21)
岡山県 齋原村	製作者集団「猪八戒」(ちょはっかい)	吉井川河口の地域づくり団体と最上流の齋原村の住民団体「製作者集団"猪八戒"」が河川をテーマに地域間交流を開始している。猪八戒は、郷土の伝統の復興を目的に、神社の夏祭り・奉納相撲の復興等を村内で行っている団体である。河口の小学生の交流やシンポジウムやイベントの開催等を行っている。(22)

その他

場所	名称	概要
神奈川県 南足柄市	水のマスタープラン	南足柄市では、地域進展の鍵は「水」にあるとの認識のもと、平成3年全国に先駆けて水資源行政を統一的行う「水資源政策課」を設置。また平成5年「水のマスタープラン」を策定。水の需給計画のみならず、水源かん養、水質保全、地下水保全、地下浸透、雨水利用、有効利用、節水、水辺環境整備、親水教育等水に係わる全ての事項を盛り込んだ計画。さらに、総合計画の中でも水利用を人口、土地利用と並ぶ重要項目としている。(24)
	水の子太郎	また、同市では、水のシンボルキャラクターとして「水の子太郎」を作成した。南足柄市職員による「水文化研究会」が作成した水マップや、同市の小学生の環境問題等に関する副読本などに登場している。
富山県 黒部市	名水キャラクター「ウォー太郎」	黒部青年会議所は、平成4年に黒部の名水キャラクターを設置することを決定し、一般募集の結果、名前は「ウォー太郎」が選定された。同会議所は、黒部市と宇奈月町にウォー太郎の誕生届けを提出。また、キャラクターデザインは漫画家藤子不二雄A氏による。同市・同町では、ウォー太郎が名水のPR活動を担当している。例えば、「水のコンサート&フェスティバル」実行委員会が同キャラクターの絵本やCDを販売し普及に務めている。(23)
高知県 四万十対策室	清流四万十川総合プラン21	高知県では1995年四万十川の「保全」「振興」「流域」を3柱とした「四万十川総合対策室」を設立、翌年「四万十川総合プラン21」を策定した。今後四万十川流域における取り組みを総合的に整理している。(4)

(2) 官民の役割分担事例

場所	概要
秋田県本荘市	行政は、市民その他が川に親しめるような公園整備、施設整備を進めている。一方で、各種市民団体は、クリーンアップ作戦などを年に数回ではあるが全市レベルで展開している。(25)
島根県美都町	行政は、護岸に緩傾斜・階段護岸を導入して生態系を維持し水に親しめる河川環境を整備している。また、集落排水整備事業により水質の浄化に務めている。一方、自治会は、河川の草刈りや、ホタルの生育環境を守る取り組みを行っている。こうした取り組みの一方で、河川改修等により、住民の意識が川から離れてしまっている。(26)
山形県寒河江市	平成8年より第4次振興計画で「花・緑・水」のせせらぎのまちづくりに取り組んでいる。行政は、二の堰親水公園の整備、沼川ふるさとの川づくり事業、寒河江城址水辺公園の整備、グランドワーク研究会（水質浄化の取り組み）ホタルのさとづくり事業、水辺の楽校（建設省事業）などを行いまちづくりを進めている。 一方、住民は沼川をきれいにする会が活動を展開。平成6年には企業も参画して会員100名が河川の清掃の取り組みを開始した。また行政と連携して、ほたるの里づくり（カワニナの養殖・放流）を実施している。(27)
岡山県笠岡市	金浦地区では旧暦5月5日の節句の夜に伝統行事「ヒツカカ」を行い、その翌日、金浦湾で「オシグランゴ」を行う。オシグランゴは、2隻の和船に6人ずつ乗船し、スピードを競うレースであり、その起源は源平合戦にあるとも言われている。船が陣を競うこの行事は、漁業が盛んであった金浦地区ならではの行事だったが、漁業の近代化に伴い、木造船の新造が途絶え、こぎ手も徐々に減少したため、行事の存続が困難になり昭和35年に中止された。しかし、その後地元の有志によって、昭和62年に復活した。復活以来、笠岡市はオシグランゴ用の木造船・櫓・運搬台などを新造して備品とし、行事のたびに貸し出す形を取っている。一方、地元住民が「ひつたか・おしぐらんご保存会」を結成し、毎年恒例の行事として受け継いでいる。地元小学生は「子供ヒツカカ」を行い、中学生はこぎ手としてオシグランゴに参加するなど、伝承活動に力を注いでいる。(28)
静岡県中川根町	平谷地区の伝統行事「平谷の流したい」は、過疎化の進展等に伴い、1地区だけの維持継承が困難となったため、近年、隣接集落である瀬沢と合同で行うようになった。当時、中川根町が流したいを文化財として指定した。これは行政の指定だけであり、補助金などで支援する類のものではなかった。が指定を受けたことで、「守るべきもの、誇れるもの」が認識し、「みんなでやろう」と、地区を拡大する動きに自然に繋がった。新住民がないため、まとまりやすかった面もある。文化財の指定を受けたことで、義務感が先に立つと続かが今はそうしたこともないという。振舞酒は自治会のお金、祝儀も自治会へ、自治会の事業として推進しており、7月14日には地区総出で行っているなど、1区でやっていた頃よりも、むしろ気運が高まっている。また行政は、生涯学習の一環として流したいを利用している。(29)

地域を映す水文化・水が導く地域の未来
水文化の保存再生を通じた水源地域の活性化方策

2000年3月発行

発行者 国土庁長官官房水資源部

〒100-8972 東京都千代田区霞ヶ関1-2-2

電話 03-3593-3311

国土庁ホームページ：<http://www.nla.go.jp>